離散最適化基礎論　第 4 回
一般グラフの最大マッチング

岡本 吉央
okamotoy@uec.ac.jp

電気通信大学

2020 年 10 月 27 日

最終更新：2020 年 10 月 28 日　22:24

スケジュール 前半 (予定)

1. マッチングの用語 (10/6)
2. 二部グラフの最大マッチング (10/13)
3. 二部グラフの最大マッチング：アルゴリズム (10/20)
4. 一般グラフの最大マッチング (10/27)

⋆ 祝日 のため 休み (11/3)

5. 一般グラフの最大マッチング：アルゴリズム (11/10)
6. 線形計画法の復習 (11/17)

⋆ 調布祭片付け のため 休み (11/24)

7. 整数計画法の復習 (12/1)

注意：予定の変更もありうる

スケジュール 後半 (予定)

8. 二部グラフの最小費用完全マッチング：線形計画法 (12/8)
- ⋆ 国際会議 のため 休み (12/15)

9. 二部グラフの最小費用完全マッチング：アルゴリズム (12/22)
10. 一般グラフの最小費用完全マッチング：線形計画法 (1/5)
11. 一般グラフの最小費用完全マッチング：完全整数双対性 (1/12)
12. 一般グラフの最小費用完全マッチング：アルゴリズム (概要) (1/19)
13. 一般グラフの最小費用完全マッチング：アルゴリズム (詳細) (1/26)
14. 予備 (2/2)

注意：予定の変更もありうる

この講義が対象とする 4 つの問題

二部グラフの 最大マッチング問題	→	二部グラフの 最小費用完全マッチング問題
↓		↓
一般グラフの 最大マッチング問題	→	一般グラフの 最小費用完全マッチング問題

この講義で行うこと

「これら 4 つの問題は多項式時間で解けること」の説明

重要な考え方

- 最適化における最大最小定理 (強双対性)
- 費用無し問題のアルゴリズム + 線形計画法 $\rightsquigarrow$
  費用有り問題のアルゴリズム (主双対法)

一般グラフ　$=$ 二部グラフであるとは限らないグラフ

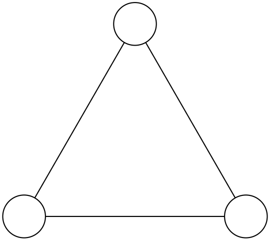
素朴な疑問

- 二部グラフでないと，最大マッチング問題の何が難しいのか？
- 二部グラフでないと，最大最小定理がないのか？

二部グラフ		一般グラフ
Hall の結婚定理	$\to$	???
Kőnig–Ore の公式	$\to$	???
Kőnig–Egerváry の定理	$\to$	???

一般グラフで，Kőnig–Egerváry の定理が成り立つとは限らない

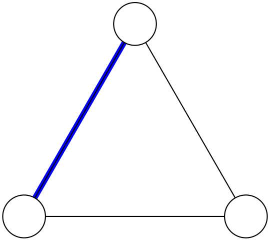
次のグラフにおいて



- $|$ 最大マッチング $| = 1$
- $|$ 最小頂点被覆 $| = 2$

$\therefore$ $|$ 最大マッチング $| < |$ 最小頂点被覆 $|$

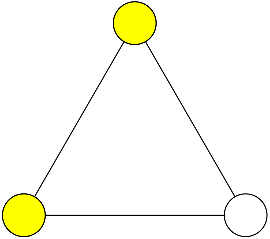
次のグラフにおいて



- $|$ 最大マッチング $| = 1$
- $|$ 最小頂点被覆 $| = 2$

$\therefore$ $|$ 最大マッチング $| < |$ 最小頂点被覆 $|$

次のグラフにおいて

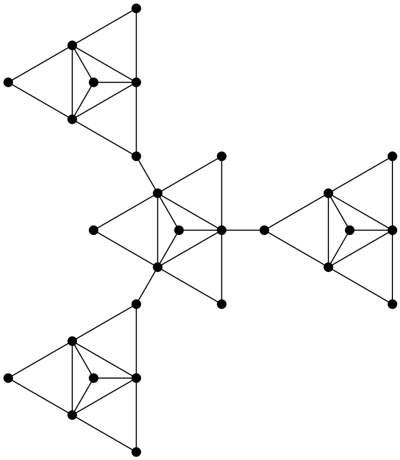


- $|$ 最大マッチング $| = 1$
- $|$ 最小頂点被覆 $| = 2$

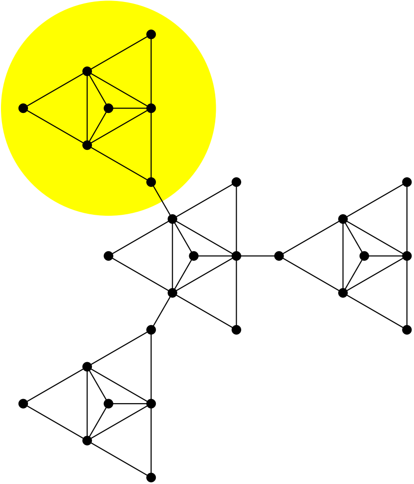
$\therefore$ $|$ 最大マッチング $| < |$ 最小頂点被覆 $|$

目次

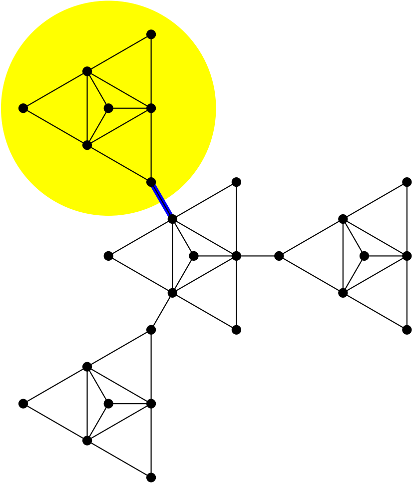
このグラフに完全マッチングは存在するか？



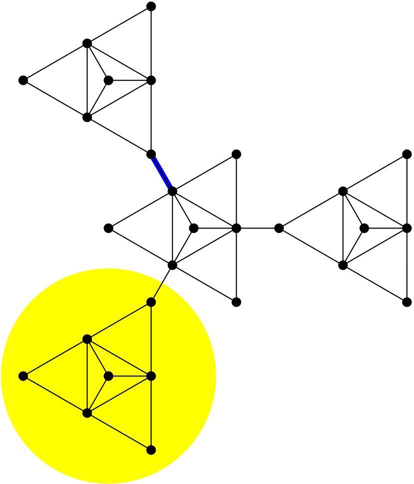
このグラフに完全マッチングは存在するか？



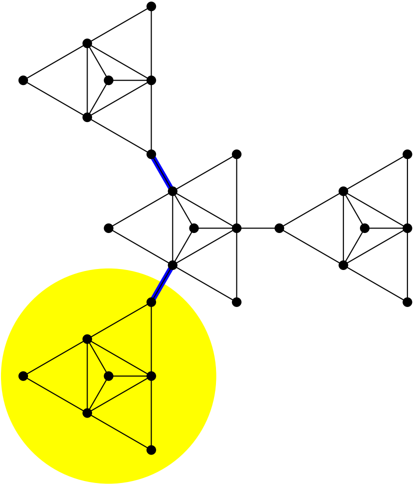
このグラフに完全マッチングは存在するか？



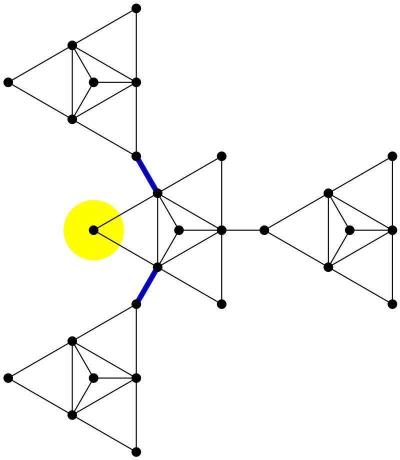
このグラフに完全マッチングは存在するか？



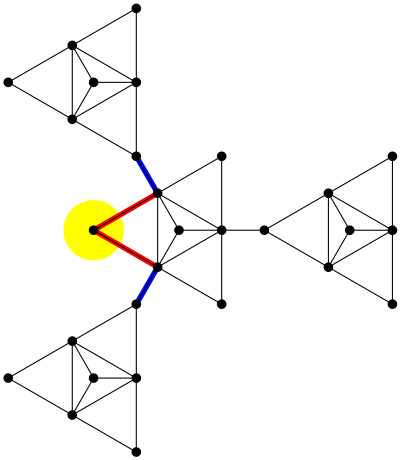
このグラフに完全マッチングは存在するか？



このグラフに完全マッチングは存在するか？

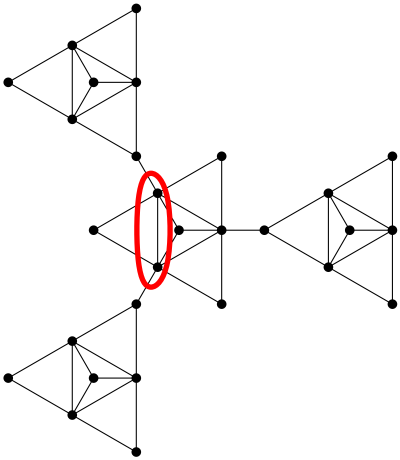


このグラフに完全マッチングは存在するか？



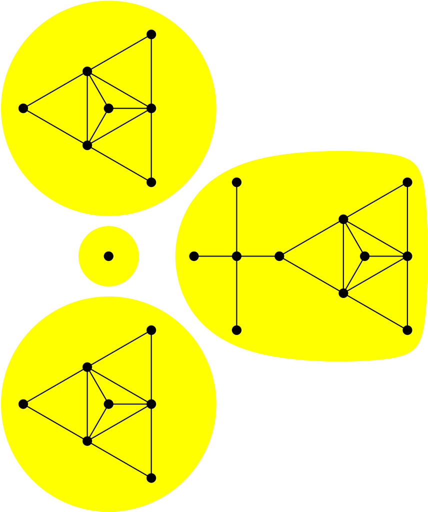
存在しない

このグラフに完全マッチングは存在するか？



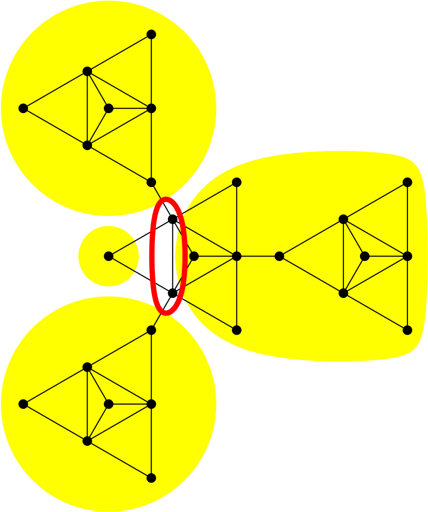
存在しない

このグラフに完全マッチングは存在するか？



存在しない

このグラフに完全マッチングは存在するか？

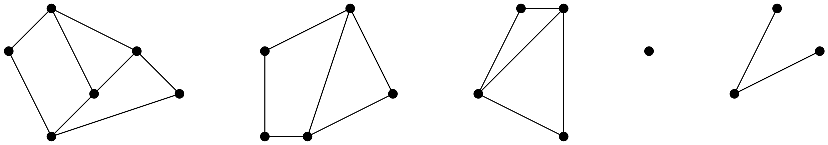


存在しない

無向グラフ $G = (V, E)$

定義：奇成分 (odd component)

G の奇成分とは，
G における連結成分で，頂点数が奇数であるもののこと



記法：奇成分の総数

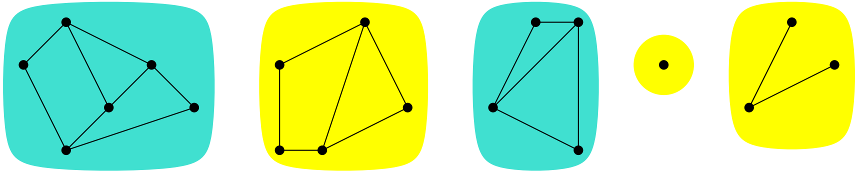
$o(G) = G$ における奇成分の総数

上の例では，$o(G) = 3$

無向グラフ $G = (V, E)$

定義：奇成分 (odd component)

G の奇成分とは，
G における連結成分で，頂点数が奇数であるもののこと

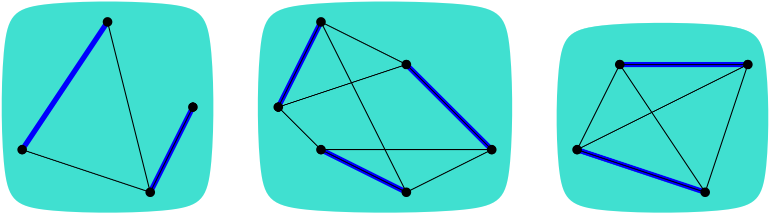


記法：奇成分の総数

$o(G) = G$ における奇成分の総数

上の例では，$o(G) = 3$

仮定：$G = (V, E)$ が完全マッチング M を持つ



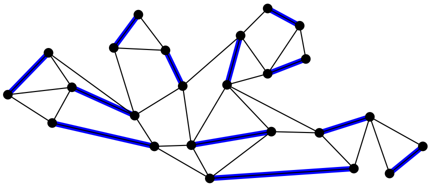
- $\therefore$ G の連結成分の頂点数は必ず偶数
- $\therefore$ $o(G) = 0$

つまり

G が完全マッチングを持つ $\Rightarrow o(G) = 0$

仮定：$G = (V, E)$ が完全マッチング M を持つ

- 任意の $U \subseteq V$ を考える



- $\therefore G - U$ の各奇成分と U の頂点を結ぶ M の辺が必ず存在
- $\therefore o(G - U) \leq |U|$

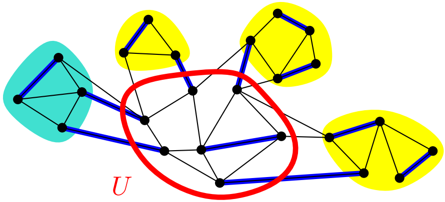
つまり

G が完全マッチングを持つ $\Rightarrow$ 任意の $U \subseteq V$ に対して $o(G - U) \leq |U|$

前のページの観察は $U = \emptyset$ のときに対応

仮定：$G = (V, E)$ が完全マッチング M を持つ

- 任意の $U \subseteq V$ を考える



- $\therefore G - U$ の各奇成分と U の頂点を結ぶ M の辺が必ず存在
- $\therefore o(G - U) \leq |U|$

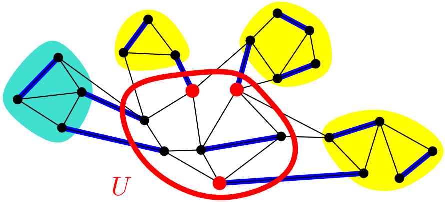
つまり

G が完全マッチングを持つ $\Rightarrow$ 任意の $U \subseteq V$ に対して $o(G - U) \leq |U|$

前のページの観察は $U = \emptyset$ のときに対応

仮定：$G = (V, E)$ が完全マッチング M を持つ

- 任意の $U \subseteq V$ を考える



- $\therefore G - U$ の各奇成分と U の頂点を結ぶ M の辺が必ず存在
- $\therefore o(G - U) \le |U|$

つまり

G が完全マッチングを持つ $\Rightarrow$ 任意の $U \subseteq V$ に対して $o(G - U) \le |U|$

前のページの観察は $U = \emptyset$ のときに対応

いま示したこと

G が完全マッチングを持つ $\Rightarrow$ 任意の $U \subseteq V$ に対して $o(G-U) \le |U|$

(Tutte 条件)

今から行うこと

「この逆も正しいこと」の証明

これが Tutte の定理

二部グラフ	$\rightarrow$	一般グラフ
Hall の結婚定理	$\rightarrow$	Tutte の定理
Kőnig–Ore の公式	$\rightarrow$	???
Kőnig–Egerváry の定理	$\rightarrow$	???

ウィリアム・タット

William T. Tutte
(1917–2002)

https://mathshistory.st-andrews.ac.uk/Biographies/Tutte/

目次

無向グラフ $G = (V, E)$

定理：完全マッチングの存在性 (Tutte '47)

G が完全マッチングを持つ $\Leftrightarrow$ 任意の $U \subseteq V$ に対して，$o(G - U) \leq |U|$ (Tutte 条件)

$\Rightarrow$ の証明： 既に示した

$\Leftarrow$ の証明： こちらを今から行う

- 任意の $U \subseteq V$ に対して，$o(G - U) \leq |U|$ であると仮定
- $U = \emptyset$ とすると，$o(G) = o(G - \emptyset) \leq |\emptyset| = 0$
- $\therefore G$ の連結成分の頂点数はどれも偶数

以下，G は連結であり，その頂点数を $2n$ として，
n に関する帰納法で証明する

無向グラフ $G = (V, E)$

補題

任意の $U \subseteq V$ に対して，$|V| \equiv o(G - U) - |U| \bmod 2$

証明：

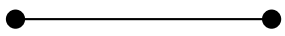
- $|V - U| \equiv o(G - U) \bmod 2$ （$\because$ 連結成分の頂点数を数える）
- $\therefore |V| = |U| + |V - U| \equiv |U| + o(G - U) \bmod 2$
- ここで，$|U| \equiv -|U| \bmod 2$ に注意 $\square$

補題の系

G の頂点数が偶数 $\Rightarrow$
任意の $U \subseteq V$ に対して，$o(G - U) \equiv |U| \bmod 2$

$n = 1$ のとき ($|V| = 2$ のとき)

- $G = (V, E)$ として考えるべきグラフは 1 通り



- このグラフは完全マッチングを持つ

つまり，成り立つ

$n \geq 1$ として，$|V| \leq 2n$ のときに成り立つと仮定

帰納法の仮定

$G' = (V', E')$ が $|V'| \leq 2n$ を満たすとき，

任意の $U' \subseteq V'$ に対して，$o(G' - U') \leq |U'|$ $\Rightarrow$ G' が完全マッチングを持つ

証明する目標

$G = (V, E)$ が $|V| = 2(n+1)$ を満たすとき，

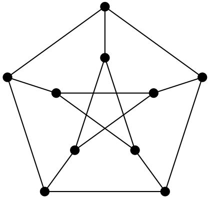
任意の $U \subseteq V$ に対して，$o(G - U) \leq |U|$ $\Rightarrow$ G が完全マッチングを持つ

2 つの場合に分けて考える

1. 任意の $U \subseteq V$ $(|U| \geq 2)$ に対して，$o(G - U) < |U|$ のとき
2. ある $U \subseteq V$ $(|U| \geq 2)$ に対して，$o(G - U) = |U|$ のとき

1 任意の $U \subseteq V$ ($|U| \geq 2$) に対して，$o(G-U) < |U|$ のとき

- 任意の $U \subseteq V$ ($|U| \geq 2$) に対して，$o(G-U) \leq |U| - 2$ ($\because$ 補題)
- 辺で結ばれた 2 頂点 a, b を考え，$A = \{a, b\}$，$G' = G - A$ とする



観察

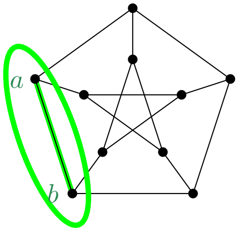
任意の $U' \subseteq V - A$ に対して，$o(G' - U') \leq |U'|$

観察の証明：

$$o(G'-U') = o(G-(U' \cup A)) \leq |U' \cup A| - 2 = |U'| + 2 - 2 = |U'| \qquad \square$$

1 任意の $U \subseteq V$ $(|U| \geq 2)$ に対して，$o(G-U) < |U|$ のとき

- 任意の $U \subseteq V$ $(|U| \geq 2)$ に対して，$o(G-U) \leq |U|-2$ $(\because$ 補題)
- 辺で結ばれた 2 頂点 a, b を考え，$A = \{a, b\}$，$G' = G - A$ とする



観察

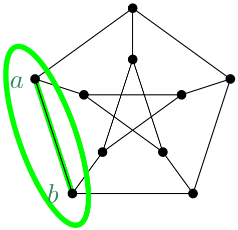
任意の $U' \subseteq V - A$ に対して，$o(G'-U') \leq |U'|$

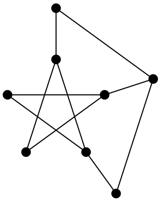
観察の証明：

$$o(G'-U') = o(G-(U' \cup A)) \leq |U' \cup A| - 2 = |U'| + 2 - 2 = |U'| \qquad \square$$

1 任意の $U \subseteq V$ $(|U| \geq 2)$ に対して，$o(G-U) < |U|$ のとき

- 任意の $U \subseteq V$ $(|U| \geq 2)$ に対して，$o(G-U) \leq |U|-2$　($\because$ 補題)
- 辺で結ばれた 2 頂点 a, b を考え，$A = \{a, b\}$，$G' = G - A$ とする





観察

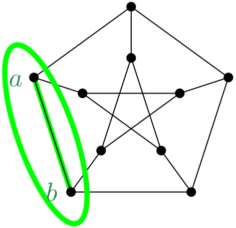
任意の $U' \subseteq V - A$ に対して，$o(G'-U') \leq |U'|$

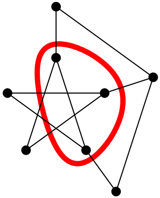
観察の証明：

$$o(G'-U') = o(G-(U' \cup A)) \leq |U' \cup A| - 2 = |U'| + 2 - 2 = |U'| \qquad \square$$

1 任意の $U \subseteq V$ $(|U| \geq 2)$ に対して，$o(G-U) < |U|$ のとき

- 任意の $U \subseteq V$ $(|U| \geq 2)$ に対して，$o(G-U) \leq |U|-2$ $(\because$ 補題)
- 辺で結ばれた 2 頂点 a, b を考え，$A=\{a,b\}$，$G'=G-A$ とする





観察

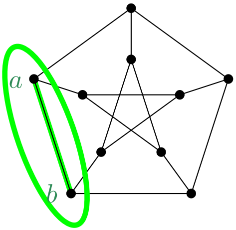
任意の $U' \subseteq V-A$ に対して，$o(G'-U') \leq |U'|$

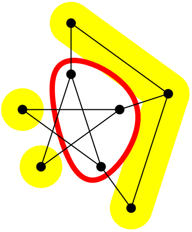
観察の証明：

$$o(G'-U') = o(G-(U' \cup A)) \leq |U' \cup A| - 2 = |U'| + 2 - 2 = |U'| \qquad \square$$

1 任意の $U \subseteq V$ $(|U| \geq 2)$ に対して，$o(G-U) < |U|$ のとき

- 任意の $U \subseteq V$ $(|U| \geq 2)$ に対して，$o(G-U) \leq |U|-2$ $(\because$ 補題$)$
- 辺で結ばれた 2 頂点 a, b を考え，$A = \{a, b\}$，$G' = G - A$ とする





観察

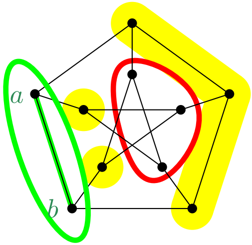
任意の $U' \subseteq V - A$ に対して，$o(G'-U') \leq |U'|$

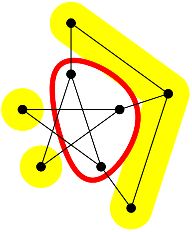
観察の証明：

$$o(G'-U') = o(G-(U' \cup A)) \leq |U' \cup A| - 2 = |U'| + 2 - 2 = |U'| \qquad \square$$

1 任意の $U \subseteq V$ $(|U| \geq 2)$ に対して，$o(G-U) < |U|$ のとき

- 任意の $U \subseteq V$ $(|U| \geq 2)$ に対して，$o(G-U) \leq |U|-2$ $(\because$ 補題)
- 辺で結ばれた 2 頂点 a, b を考え，$A = \{a, b\}$，$G' = G - A$ とする





観察

任意の $U' \subseteq V - A$ に対して，$o(G'-U') \leq |U'|$

観察の証明：

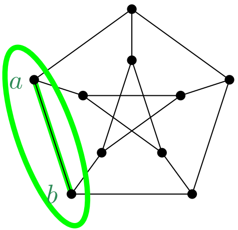
$$o(G'-U') = o(G-(U' \cup A)) \leq |U' \cup A| - 2 = |U'| + 2 - 2 = |U'| \qquad \square$$

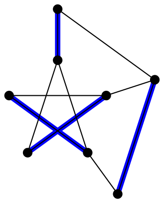
1 任意の $U \subseteq V$ $(|U| \geq 2)$ に対して，$o(G-U) < |U|$ のとき

観察：再掲

任意の $U' \subseteq V - A$ に対して，$o(G'-U') \leq |U'|$

- つまり，帰納法の仮定から，G' は完全マッチング M' を持つ





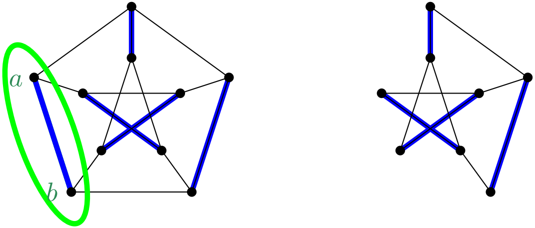
- このとき，$M' \cup \{\{a,b\}\}$ は G の完全マッチングである
- $\therefore G$ は完全マッチングを持つ

1 任意の $U \subseteq V$ $(|U| \geq 2)$ に対して，$o(G-U) < |U|$ のとき

観察：再掲

任意の $U' \subseteq V - A$ に対して，$o(G'-U') \leq |U'|$

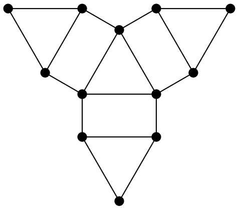
- つまり，帰納法の仮定から，G' は完全マッチング M' を持つ



- このとき，$M' \cup \{\{a,b\}\}$ は G の完全マッチングである
- $\therefore G$ は完全マッチングを持つ

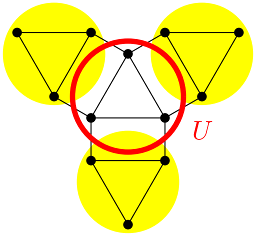
2 ある $U \subseteq V$ $(|U| \geq 2)$ に対して，$o(G-U) = |U|$ のとき

- $o(G-U) = |U|$ となる $U \subseteq V$ の中で要素数が最大のものを考える
  - つまり，$|U'| > |U|$ ならば，$o(G-U') \neq |U'|$ となる



2 ある $U \subseteq V$ ($|U| \geq 2$) に対して，$o(G-U) = |U|$ のとき

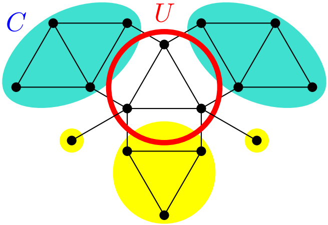
- $o(G-U) = |U|$ となる $U \subseteq V$ の中で**要素数が最大**のものを考える
  - つまり，$|U'| > |U|$ ならば，$o(G-U') \neq |U'|$ となる



観察 1

$G - U$ の連結成分はすべて奇成分

観察 1 の証明：$G - U$ に偶成分 C があると仮定

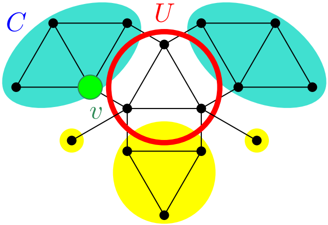


- C には，U のある頂点と隣接する頂点が存在する　($\because$ G は連結)
- そのような頂点を v として，$U' = U \cup \{v\}$ とする
- このとき，$o(G - U') \le |U'|$　(仮定)
- 一方で，$o(G - U') \ge o(G - U) + 1 = |U| + 1 = |U'|$
- $\therefore$ U' は $o(G - U') = |U'|$ と $|U'| > |U|$ を満たす
- これは，U の最大性に矛盾　□

観察 1

$G - U$ の連結成分はすべて奇成分

観察 1 の証明：$G - U$ に偶成分 C があると仮定

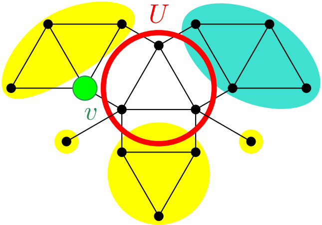


- C には，U のある頂点と隣接する頂点が存在する　($\because G$ は連結)
- そのような頂点を v として，$U' = U \cup \{v\}$ とする
- このとき，$o(G - U') \leq |U'|$　(仮定)
- 一方で，$o(G - U') \geq o(G - U) + 1 = |U| + 1 = |U'|$
- $\therefore U'$ は $o(G - U') = |U'|$ と $|U'| > |U|$ を満たす
- これは，U の最大性に矛盾　$\square$

観察 1

$G - U$ の連結成分はすべて奇成分

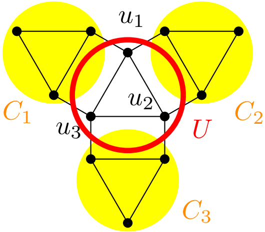
観察 1 の証明：$G - U$ に偶成分 C があると仮定

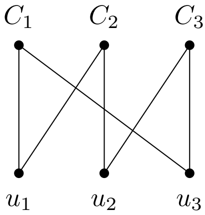


- C には，U のある頂点と隣接する頂点が存在する (∵ G は連結)
- そのような頂点を v として，$U' = U \cup \{v\}$ とする
- このとき，$o(G - U') \leq |U'|$ (仮定)
- 一方で，$o(G - U') \geq o(G - U) + 1 = |U| + 1 = |U'|$
- $\therefore U'$ は $o(G - U') = |U'|$ と $|U'| > |U|$ を満たす
- これは，U の最大性に矛盾 □

ここで，次のような二部グラフ $H = (A, B, F)$ を考える

- $A = G - U$ の奇成分，$B = U$
- $F = \{\{a, v\} \mid G$ において a のある頂点と v が隣接 $\}$

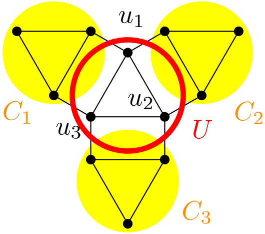


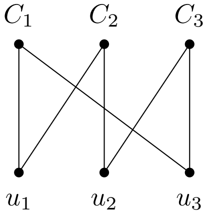


観察 2

H は完全マッチングを持つ

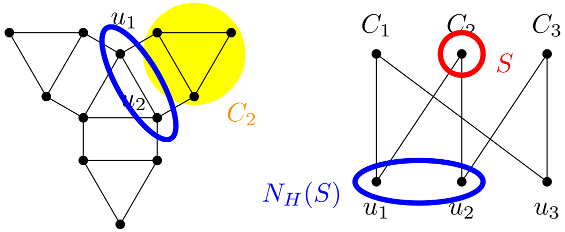
観察 2 の証明：Hall の結婚定理を使う





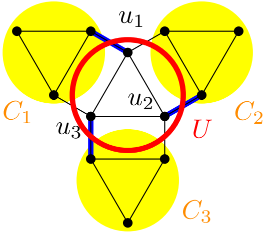
- 任意の $S \subseteq A$ を考える
- $|S| \leq o(G - N_H(S))$ 　　($\because$ S の各奇成分は $G - N_H(S)$ の奇成分)
- また，$o(G - N_H(S)) \leq |N_H(S)|$ 　　(仮定)
- $\therefore |S| \leq o(G - N_H(S)) \leq |N_H(S)|$
- Hall の結婚定理より，H は完全マッチングを持つ $\square$

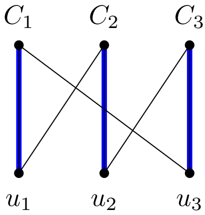
観察 2 の証明：Hall の結婚定理を使う



- 任意の $S \subseteq A$ を考える
- $|S| \leq o(G - N_H(S))$ $\quad$ ($\because$ S の各奇成分は $G - N_H(S)$ の奇成分)
- また，$o(G - N_H(S)) \leq |N_H(S)|$ $\quad$ (仮定)
- $\therefore |S| \leq o(G - N_H(S)) \leq |N_H(S)|$
- Hall の結婚定理より，H は完全マッチングを持つ $\square$

H の完全マッチングを 1 つ固定し，それを用いて，
$G - U$ の奇成分と U の間の辺を完全マッチングの辺 (の一部) として選ぶ

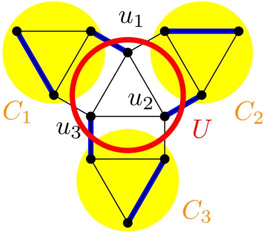


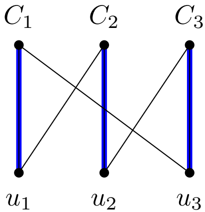


観察 1 より，$G - U$ に偶成分はないので，
あとは，$G - U$ の奇成分の中で完全マッチングを構成できればよい

Tutteの定理：証明 (10)

H の完全マッチングを 1 つ固定し，それを用いて，
$G - U$ の奇成分と U の間の辺を完全マッチングの辺 (の一部) として選ぶ





観察 1 より，$G - U$ に偶成分はないので，
あとは，$G - U$ の奇成分の中で完全マッチングを構成できればよい

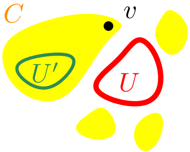
$G-U$ の奇成分 C，C の任意の頂点 v

観察 3

$C-v$ は完全マッチングを持つ

観察 3 の証明：

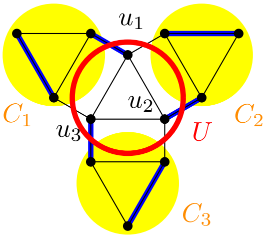
- $C-v$ の任意の頂点部分集合 U' を考える
- 背理法のため，$o((C-v)-U') > |U'|$ とする
- 補題より，$o((C-v)-U') \geq |U'|+2$
- したがって，

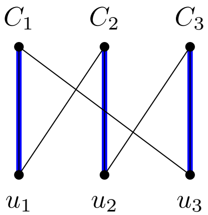


$$
\begin{aligned}
o(G-(U'\cup\{v\}\cup U)) &= o((C-v)-U') + o(G-U) - 1\\
&\geq (|U'|+2) + |U| - 1\\
&= |U'| + 1 + |U|\\
&= |U'\cup\{v\}\cup U|
\end{aligned}
$$

観察 3 の証明 (続き)：

- 一方で，$o(G-(U' \cup \{v\} \cup U)) \le |U' \cup \{v\} \cup U|$ (仮定)
- $\therefore o(G-(U' \cup \{v\} \cup U)) = |U' \cup \{v\} \cup U|$ かつ $|U' \cup \{v\} \cup U| > |U|$
- これは U の最大性に矛盾
- ゆえに，$o((C-v)-U') \le |U'|$
- $\therefore$ 帰納法の仮定によって，$C-v$ は完全マッチングを持つ □





観察 1, 2, 3 より，G は完全マッチングを持つ □

目次

アイディア

二部グラフに対する Kőnig–Ore の公式と同様に
Tutte 条件の「不足分」から 最大マッチングの要素数が分かる

Tutte 条件：$o(G-U)-|U| \leq 0$

定理：Berge–Tutte の公式

無向グラフ $G=(V,E)$ に対して

$$|\,\text{最大マッチング}\,| = \min \frac{1}{2}\{|V| - o(G-U) + |U| \mid U \subseteq V\}$$

注：G が完全マッチングを持つ $\Rightarrow$ 右辺 $=|V|/2$

二部グラフ	$\to$	一般グラフ
Hall の結婚定理	$\to$	Tutte の定理
Kőnig–Ore の公式	$\to$	Berge–Tutte の公式
Kőnig–Egerváry の定理	$\to$	???

2 つの不等式の簡単な方を証明する

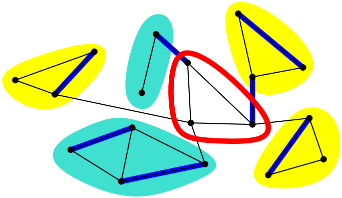
Berge–Tutte の公式 (弱双対性)

無向グラフ $G=(V,E)$ における，
任意のマッチング M と任意の頂点部分集合 U に対して

$$2|M| \leq |V| - o(G-U) + |U|$$

証明：M が飽和する頂点全体の集合を A とする

- $G-U$ の奇成分の頂点集合を $O_1,\ldots,O_k$，
  偶成分の頂点集合を $E_1,\ldots,E_\ell$ とする



2 つの不等式の簡単な方を証明する

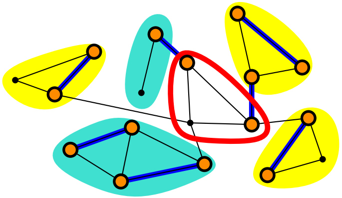
Berge–Tutte の公式 (弱双対性)

無向グラフ $G=(V,E)$ における，
任意のマッチング M と任意の頂点部分集合 U に対して

$$2|M| \leq |V| - o(G-U) + |U|$$

証明：M が飽和する頂点全体の集合を A とする

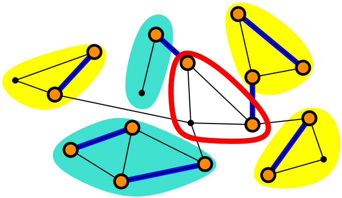
- $G-U$ の奇成分の頂点集合を $O_1,\ldots,O_k$，
  偶成分の頂点集合を $E_1,\ldots,E_\ell$ とする



証明 (続き)：このとき

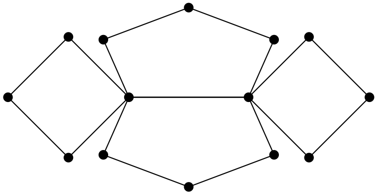
$$\begin{aligned}
2|M| = |A| &= |U \cap A| + \sum_{i=1}^{k} |O_i \cap A| + \sum_{j=1}^{\ell} |E_j \cap A| \\
&\leq |U| + \sum_{i=1}^{k} (|O_i| - 1) + |U| + \sum_{j=1}^{\ell} |E_j| \\
&= |U| + \sum_{i=1}^{k} |O_i| + \sum_{j=1}^{\ell} |E_j| - k + |U| \\
&= |V| - o(G - U) + |U|
\end{aligned}$$

□



$d = \max\{o(G - U) - |U| \mid U \subseteq V\}$ とする ($d \geq 0$ に注意)

- 頂点数 d の完全グラフ K_d を考え，
  G の各頂点と K_d の各頂点を辺で結んだグラフを G' とする



今から示すこと

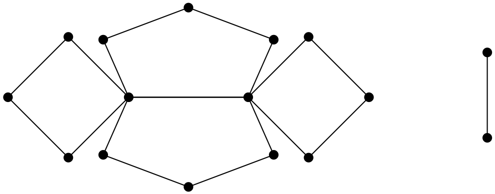
G' は完全マッチングを持つ

そのために，Tutte の定理を使う

- $d = 0$ のとき，$G' = G$ であり，G は完全マッチングを持つので，
  G' も完全マッチングを持つ
- $\therefore d \geq 1$ と仮定する

$d = \max\{o(G-U) - |U| \mid U \subseteq V\}$ とする ($d \geq 0$ に注意)

- 頂点数 d の完全グラフ K_d を考え，
  G の各頂点と K_d の各頂点を辺で結んだグラフを G' とする



今から示すこと

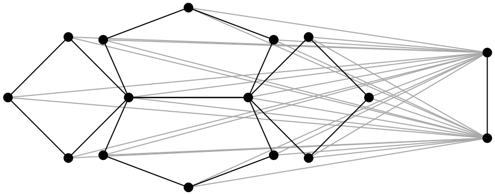
G' は完全マッチングを持つ

そのために，Tutte の定理を使う

- $d = 0$ のとき，$G' = G$ であり，G は完全マッチングを持つので，
  G' も完全マッチングを持つ
- $\therefore d \geq 1$ と仮定する

$d = \max\{o(G-U) - |U| \mid U \subseteq V\}$ とする ($d \geq 0$ に注意)

- 頂点数 d の完全グラフ K_d を考え，
  G の各頂点と K_d の各頂点を辺で結んだグラフを G' とする



今から示すこと

G' は完全マッチングを持つ

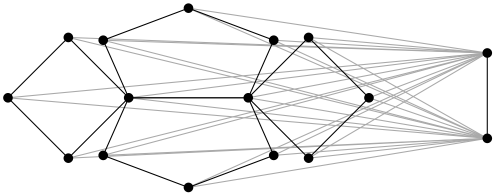
そのために，Tutte の定理を使う

- $d = 0$ のとき，$G' = G$ であり，G は完全マッチングを持つので，
  G' も完全マッチングを持つ
- $\therefore d \geq 1$ と仮定する

Tutte の定理

無向グラフ $G' = (V', E')$ に対して

G' が完全マッチングを持つ $\Leftrightarrow$ 任意の $U' \subseteq V'$ に対して，$o(G' - U') \leq |U'|$

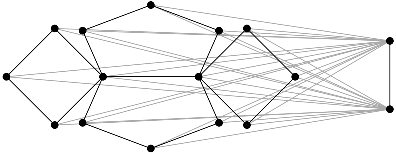


3 つの場合に分けて考える

1. $U' = \emptyset$ のとき
2. U' が K_d の頂点をすべて含むとき
3. それら以外のとき

1 $U' = \emptyset$ のとき

- $o(G') = o(G' - U') \equiv (|V| + d) + |U'| = |V| + d \bmod 2$ $\quad$ ($\because$ 補題)
- $d = \max\{o(G - U) - |U| \mid U \subseteq V\} \equiv |V| \bmod 2$ $\quad$ ($\because$ 補題)
- $\therefore |V| + d \equiv |V| + |V| \equiv 0 \bmod 2$
- $d \geq 1$ のとき，G' は連結なので，$o(G') \leq 1$
- $\therefore o(G') = 0$



補題 (証明済み)

任意の無向グラフ $G = (V, E)$ と任意の $U \subseteq V$ に対して，

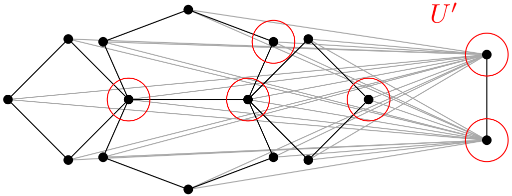
$$|V| \equiv o(G - U) - |U| \bmod 2$$

2 U' が K_d の頂点をすべて含むとき

- $\tilde{U} = U' \cap V$ とする
- このとき，

$$
\begin{aligned}
o(G' - U') - |\tilde{U}| &= o(G - \tilde{U}) - |\tilde{U}| \\
&\leq \max\{o(G - U) - |U| \mid U \subseteq V\} \\
&= d
\end{aligned}
$$

- $\therefore o(G' - U') \leq |\tilde{U}| + d = |U'|$

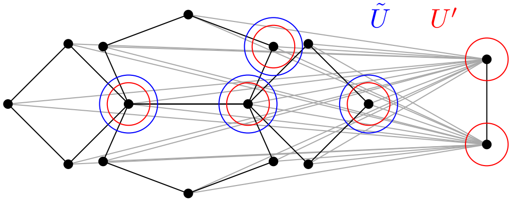


2 U' が K_d の頂点をすべて含むとき

- $\tilde{U} = U' \cap V$ とする
- このとき，

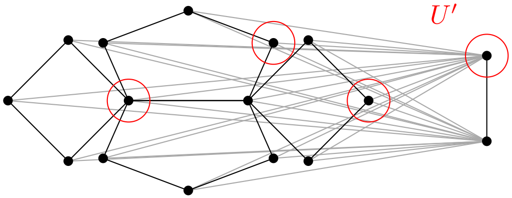
$$\begin{aligned} o(G' - U') - |\tilde{U}| &= o(G - \tilde{U}) - |\tilde{U}| \\ &\leq \max\{o(G - U) - |U| \mid U \subseteq V\} \\ &= d \end{aligned}$$

- $\therefore o(G' - U') \leq |\tilde{U}| + d = |U'|$



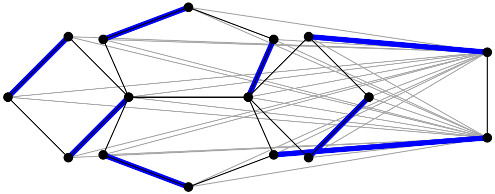
3 それら以外のとき

- $G - U'$ は連結であり，つまり，$o(G - U') \leq 1$
- $U' \neq \emptyset$ なので，$o(G' - U') \leq 1 \leq |U'|$



ゆえに，G' は完全マッチングを持つ

M' を G' の完全マッチングとする

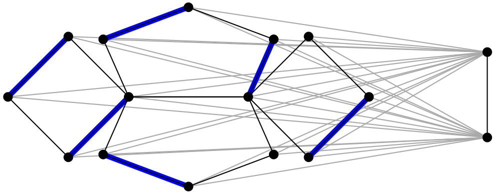


- M' の辺で G の頂点同士を結ぶものを集めて，M とする
- M は G におけるマッチングであり，

$$|M| \geq |M'| - d = \frac{|V| + d}{2} - d = \frac{1}{2}(|V| - d)$$

- $\therefore$ $|G$ の最大マッチング$| \geq |M| \geq \dfrac{1}{2}(|V| - d)$ $\square$

M' を G' の完全マッチングとする

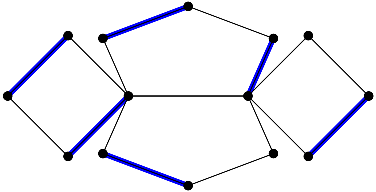


- M' の辺で G の頂点同士を結ぶものを集めて，M とする
- M は G におけるマッチングであり，

$$|M| \geq |M'| - d = \frac{|V| + d}{2} - d = \frac{1}{2}(|V| - d)$$

- $\therefore$ $|G$ の最大マッチング$| \geq |M| \geq \dfrac{1}{2}(|V| - d)$ $\square$

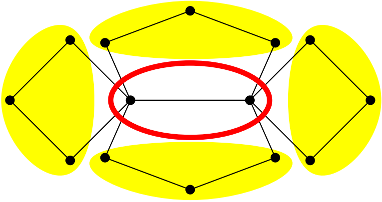
次のマッチングが存在する



このことから，

$$\text{最大マッチングの辺数} \geq 6$$

次の頂点部分集合 U を考える



弱双対性より

$$\text{最大マッチングの辺数} \leq \frac{1}{2}(14 - 4 + 2) = 6$$

したがって，最大マッチングの辺数 $= 6$

Berge–Tutte の公式 (弱双対性)

無向グラフ $G = (V, E)$ における，マッチング M と頂点部分集合 U に対して

$$2|M| \leq |V| - o(G - U) + |U|$$

今日のまとめ

重要概念

- 奇成分
- Tutte の定理，Berge–Tutte の公式

次回予告

- 一般グラフの最大マッチングのアルゴリズム
- 重要概念 1：花
- 重要概念 2：グラフの縮約

目次